

複合営農に見る

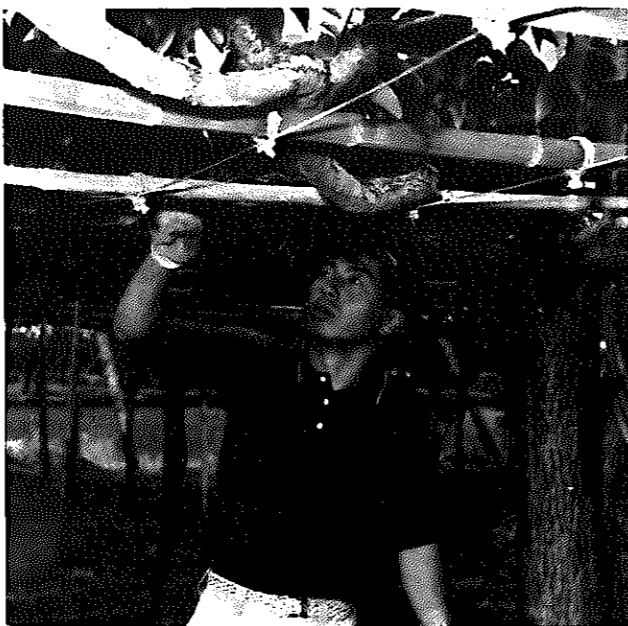
本市農業の振興のため、市が打ち出している重点施策の一つに、複合営農の推進が上げられます。この重点施策は、「うまい米」を主とする稲作を軸に、これに果樹、野菜、園芸、畜産などを結びつけた「複合経営」により、年間農内就労のできる農業を確立しよう、ということ。複合経営をめざすためには、意欲的で能力のある後継者や中核的担い手を育てることが必要です。このため市では、農業大学講座の開設、農業サークル活動、農業青年の海外派遣事業に助長するなどこれまで、農業生産の担い手の育成に力を注いできています。一方、生産性の高い農業経営に欠かせない生産基盤の整備につい

ては、土地改良区と連携をとりながら進めています。しかしながら水田利用再編対策という米の生産調整は、ややもすると農業者の生産意欲を失わせる恐れもあります。このため、「米の消費拡大運動」や「うまい米量産推進運動」「土づくり運動」を積極的に展開し、さらに、複合経営の拡大に資するため、作物の「価格安定制度への加入と流通の近代化」を進めるなど、地域に適合した農業生産と、地域複合営農の確立をめざしています。このほか水田利用再編対策とも関連づけられますが、麦、大豆など国内需給率の低い作物の振興を図るための農業生産の増強策も、必然的に複合営農の道となってい

ます。また、農村集落は生活の場であるとともに、生産の場でもあるとの認識に立って、その生活環境をより快適なものにする努力も怠ってはなりません。環境の劣悪な地域には、意欲的で能力のある後継者は育たないし、生産の振興も期待できません。このため、四十九年度から農村総合整備モデル事業に取り組んでいますし、研修、娯楽などの施設整備のため、昨年度は真木、新村、下八枚、西笠巻の四地区に集会場を、さらに本年度も、新飯田地区に改善センター（地域生活センター）を建設。このほか、三月十五日号でも掲載したとおり、新しい村づくりのため「新農業振興地域

整備計画」の策定にも取り組んでいます。★ ★ ★ ここに概略した諸施策が直ちに効を奏し、市内各農家が理想的な営農形態になると、にわかには期待できないにしても、こうした諸施策の推進を農家自身がより真剣に受けとめ、少しでも単一経営から複合経営に移行させ、新潟県における食糧総合供給基地としての地位確立と、農業所得の増大を図らなければなりません。ここに紹介する青年たちは、市内農業者のほんの「ひと握り」ですが、彼等の積極的な農業経営を見ると、そこには「土に生きる」という、ひたむきな姿勢があります。

土に生きる若者たち



耕作面積を広げたい

吉沢浩行さん (22歳・丸湯)

経営形態 水稲 + 果樹

浩行さんの農業にかける抱負は「耕作面積をもっと拡大し、梨の栽培を、経営の主軸に持っていく」ことだそうです。しかしながら現実を見ると、地価の高騰などで、農地の流動化は停滞気味で、「思ってもなかなかできない」と、規模拡大の難しさを話しています。高校を卒業と同時に就農。水稲を専攻してきたことから、二年前までは米作りが浩行さんの担当で、果樹は父親の健司さんが。彼は今、梨の栽培に興味を持っ

ているといいます。苗木を育て、自分の理想に木の型を作る——こんな創作が、たまらなく好きなんだそうです。減反、米価据置き、果樹価格の変動の著しい中で、憤りを感じながらも「今が正念場。今苦しくてもいつかは良かったという日が来ると思っている。勤めに出て、親が年老いてから農業をやってもうまくはいかないと思う。農業はそんなに甘くはないですから」と、彼の表情には情熱と自信があふれています。

国外で学ぶ

大矢重幸さん (28歳・根岸)

経営形態 水稲 + 花卉



約六百六十一平方メートルの温室には赤い花をつけたカーネーションや珍しいスマイラックスが所狭しと植えられ、重幸さんの切り出しを待っている。通年農業をめざし、冬場の仕事として三年前に取り組んだカーネーション栽培。技術の習得は、知人の紹介で広島県の農家へ。八か月間、そこで働きながら学んだとのこと。 「始める時はオフクロに反対され、困りました」と重幸さん。今は栽培、出荷ともに順調で、冬の仕事から年間を通しての仕事に。

そこは家族の協力でやりくりしているそうです。また、彼はアメリカとフィリピンに渡り、それぞれの国の農業を体験しています。動機は「外国の農業者の考え方を学びたかったから」で、印象はアメリカは「金もうけ主義」、フィリピンは「百姓らしい」。彼はフィリピン農業に魅力を感じたといいます。こうした体験からか、「米も野菜も肉も、自給自足のできる多角的な農業を子供と一緒にしたい」と将来の構想を話してくれました。